

英会話に自信を持つために

— 経験と学習の相互作用 —

情報学部 ジュリアン・バンフォード

1949年英国生まれ。米国アンティオック大学にて外国語としての英語教授法について修士課程を修める。1986年より文教大学にて教鞭をとる。現在の研究分野は外国語としてのリーディング教授法。また、現在ハワイ大学のリチャード・デイ氏と共に *Extensive Reading in the Second Language Classroom* (New York: Cambridge University Press, 1997) を執筆中。

多くの学生にとって文教大学での英語教育は完璧なものとはなっていないようです。これは講義内容や先生方に問題があるわけではなく、基本的な事を我々が見落としているためだと思われます。以下の文書の中で私がどのように学生に英語を使うための自信とその機会を与えているか、いかに私の方法が他の新しい英語教授法と違い、コストの低いものか説明していきたいと思います。

文教大学は今年 70 周年を記念して国際会議を開催しました。このシンポジウムの準備の際、「私の学生」の中から英会話のできるボランティアを推薦してほしいとの連絡がありました。このような要請は今回が初めてではありません。では、なぜこのような要請が私の研究室に度々くるのでしょうか？ 一つには、私の研究室にはいつも学生が訪れ「英会話をして楽しんでいる」という噂からかもしれません。バンフォード研究室のドアはいつも開いたままになっていますので、研究室の前を通り過ぎたならば誰もが活気のある、時として著しく騒々しい英語でのおしゃべりや笑い声、また学生や湘南キャンパスの近隣にお住まいの方々がモニターに吸いつくように、日本語字幕なしの映画や英会話のクラスのビデオを見ていることにも気づかれることでしょう。

私の研究を訪ねてくる人々は「私の学生」ではありません。彼らの中には文教生ではない人もいますし、卒業生や湘南キャンパスの近隣にお住まいの方々もいます。私は情報学部広報学科に属していますが、研究室の中の

文教生の大半は国際学部の学生や卒業生です。私の研究室を利用している学生がすべて英会話の上級者というわけではなく、まったく英会話のできない学生、ほとんどバイリンガルの帰国子女、または留学生など様々なレベルの学生が、一つの共通点を接点に英語でコミュニケーションをはかっています。彼らは皆「英語を学びたい」、「英語を実践したい」と強く感じている学生なのです。

私が自分の研究室を学生等に開放している最大の理由は、英語を教授する者の一人として自分の研究や経験を通して「英語をマスターするためには通常の講義、授業等以外の場所やチャンスが必要」という結論に達したからです。外国語を学ぶことは一つの学問分野を修得するというよりも、むしろ車の運転をマスターしたり、ゴルフの腕を上げるといったことに近いのではないかと思います。つまり、外国語を学ぶことは実践を通しての現実的な能力の開発をし、それを発達させる事といえるのではないかと思います。英語をマスターするためには英語を勉強(学ぶ)する必要があります。しかし勉強(学ぶ)時間以外に

も「英語を実践する」為の多くの時間が英語をマスターするためには必要となります。そして英語を実際に使うことにより、学習者は「英語について」学ぶのではなく、「英語そのもの」をより効果的に学ぶことができるのです。

英語などの外国語を実践する事なしに学ぶことはとても不自然でありかつ非効率であります。大学受験や英語検定試験等のテストを「英語を実践」せずに孤独に勉強した弊害として、一部の先生の間や学生の中に実際に英語をコミュニケーションの道具としてスムーズに使えない人々を多く見つけることができます。また逆に英語を実践するだけでは学習効率は高くなりません。その代表的な例として、私自身のように外国で長く生活しているのにその国の言葉がなかなか上達しない人々の話をよく耳にします。ですから外国語学習の理想の姿とは、「外国語を勉強する」、「外国語を実践する」という二つのコンビネーションが必要と思います。効果的に外国語をマスターするために学習者は言葉が実際にどのように使われているかを提示され、理解する場（勉強）と勉強した事柄を実際に使ってみる場（経験）が必要だと強く思います。

ある木曜日に私は授業の中で “It’s none of your business.” というフレーズを教えました。普通はこのようなフレーズは簡単に忘れ去られてしまいます。しかし、私がこの原稿を書いているとその授業に参加していた学生の一人が “It’s none of your business.” とこの研究室の中で実際に使い、このフレーズの意味のわからない人に意味を教え彼らの会話の中でボーイフレンドのことや個人的な事柄等を話しているときに実際に何度も何度も繰り返し使っているではありませんか！このように授業等で勉強した言葉を自分たちに関係のある、又は自分たちの実際の生活の中で実践することにより、それらを簡単に自分の言葉にすることができるのです。授業、講義だけでは習ったことを簡単に忘れてしまいますし、実際に会話をするだけでは新しいことを学ぶことは難しいでしょう。（勉強）と

（経験）が正しく行われてこそ言葉は効率的に学習されるのです。

語学学習の中で「習ったことを実際に使ってみる」という部分が現在一般的に一番足りない部分ではないかと思います。我々言葉を教える立場の者は授業で教える事象、授業中に練習することで十分と思い込み、学生は授業で学んだことを忘れずに覚えておくことが彼らの役目と思いこんでいるようです。しかし我々は言葉を本来あるべき姿である「実際のコミュニケーション」から切り放してしまったために、学生が語学をマスターすることをほとんど不可能にしてしまいました。授業のような人工的な環境下では、「実際のコミュニケーション」に明白な限界がありますが、現実にはクラスよりももっと内容のある、もっと効果的な、実際に言葉を使うチャンスがあります。

「実際のコミュニケーション」を英語で実践してもらうために私は自分の研究室を英語が使える場所、ランゲージセンターとして英語学習者に開放しています。

私はこのランゲージセンターに辞書なしで簡単に読むことのできるおもしろい本、人気のある映画の日本語の字幕ではなく英語の字幕のついているものを設置しています。映画のビデオを見るためビデオデッキとモニターや、お茶を飲みながらリラックスして英会話を楽しんでもらうためのテーブルセットなどもあります。またモニターではミュージックビデオや、私の映画を使った語彙強化のための特別クラスのビデオ等も見ても勉強することができます。国際学部の生田祐子先生や女子短大の John Abrahams 先生のように私の研究室に直接学生を連れてきてランゲージセンターを紹介してくれる先生方には深く感謝しています。そして、国際学部の Irene Waller 先生のように昼休みに学生と英語でおしゃべりするためにわざわざ来て下さる先生方の協力もあるおかげで私の研究室はランゲージセンターとして成り立っています。

悲しいことに英語の授業の大半は和訳や、テストのスキルを教えるための英語検定や

TOEFL テストを使ったもので、これらは時に学生のレベルをはるかに超えるために、彼らからやる気を削ぎ、英語を「実際のコミュニケーション」の道具をして教える事が不可能になっています。またこれらのテスト用の知識は「実際のコミュニケーション」の際に広く役立つものでもありません。以上のことから私は正規の授業以外にも研究室で個人的に授業をしています。なにぶん忙しいので他の先生に協力をお願いしています。その中の一人に国際学部の臼井直人先生がいます。彼は基本的に週一回英語でのディベートを学生にあったトピックを使って教えてくれています。

このランゲージセンターでは学生も時に先生として活躍しています。彼らが英語で会話をしている際に、自分の言いたい事が英語でどう表現してよいかわからない時に“How do you say XXX in English?”というパターンを使ってお互いに質問をし合います。例えば、“How do you say 面倒くさい in English?”(宿題が面倒)、“How do you say むかつく in English?”(バイト先の店長はむかつく)、“How do you say だるい in English?”(今日体がだるい)、“How do you say よろしくお願ひします in English?”(自己紹介の時に)などがよくでる質問です。よく使われるフレーズは学生同士で即座に回答できますが、誰もその答えを知らない時などは、質問用紙が用意してありますのでその用紙に質問を書き、質問箱の中に入れます。するとその日のうちに質問の答えが返ってくるようになっています。学習者にこのようにいつでも自分が尋ねたい時に質問ができる方法を与えると、全く英語を話せることのできない初心者でさえも徐々に自信を持って英語を使い始めることができるのです。

ランゲージセンターを利用した学生の多くは英会話に対する自信を深め、その中の何人かの学生は海外の大学での学士号や修士号を取得された人もいます。彼らの偉業は私ただ一人が手助けしたわけではなく、他の多くの先生方の多方面にわたるご助力、そして彼ら

自身の努力があったからこそ、それらの偉業は達成されたと思います。その中で私がここで彼らに提供していることとは、湘南キャンパスが英語教育のために今必要なもののほんの一つです。しかし、たった一つの小さなパズルのピースをはめ込むだけで今まで存在した英語教育が今まで以上の意味を持つことになります。英語を実際に使うための環境、英語を実際に使うための学生への励まし、英語を効果的に学習するための教材が私によって提供された小さなものです。

もし私達が学生の未来にとってより不可欠な語学力を今まで以上に効果的に彼らに提供したいと望むならば、私が実践しているような新しい試みが必要なのではないのでしょうか。湘南キャンパスのほんの一握りの学生は私の研究室を知り、利用することができました。しかし、文教大学が実践的な英語の勉強法、英語を実際に使う場の必要性やニーズを正しく認識して本物のランゲージセンターを設立するための投資をわずかながらしたならば、より多くの学生に今現在この研究室で提供できるものを利用してもらえることでしょうか。高価なLL教室は必要ありません。大学からの公式なサポートと今以上の広さの部屋だけあればよいのです。